

氣を映出し風尙と餘韻とを第一義とし物象其物は末技として觀者の思索に放任し霸氣横溢して其要領を穿たざるに到ては憾なきを得ず個人の嗜味のために描ける繪畫としても如此は頗る藝術に對して不親切なりと云はざる可からず元來吾人は知識の深淺經驗の多少等に由り感情に相違ある者なれば畫題を確實に捉へ物象を精確に寫すにあらざれば彼の虎を描いて狗に類するの誹りを不免往々文人畫に對する滑稽の沙汰は聞く處なり是れ或は淺薄なる少壯畫家の一弊ならんも概して東洋畫に於ては科學的確實性を無視し天才に放縱して不知不識不自然に蹈り後は漸く糟粕に慣れて其妙味を等閑にして遂に一彩を傳し得ざるを見れば頗る落漠の感なしとせず之に反して西洋畫の科學的確實を具備し頗る堅實とを併せ有するものと比較せば均しく繪畫にして彼と是とは琴を操て齊間に立つが如し元來繪畫は情の投影なれば慢りに主觀的空想を恣にするべきに非ず客觀的確實性の印象なれば情意の相對的經驗と不離の關係を有するものとして社會の文化と吾人の性情とを纏綿として發

展する者なれば宗教的眞理の外廓を周匝せんものと云ふも敢て過言にあらざる可きか古來より宗教と繪畫相依り相扶けて進歩發達したるを見れば蓋し思ひ半に過ぎざるなり所謂繪畫は小乗教により何人にも入り易き發心門にして劣機下根の凡夫も一度機縁の純熟に會しては則ち光耀海中の人となるにあらずや余嘗て聞く繪畫を學ぶの最大要件は複雑豊富なる學識や經驗にあらずして赤子天真の心情にありと云ふ然るが故に名畫には畫家の高尚なる精神渾然として具象的意義を現はし無限の興味を興ふるものなり誰か斯の手に描かれたる落日の壯觀を見て崇高の心昂らざる寒林の靜寂に歸依の思ひ湧かざる畫家の感得せる感情は觀者をして又宇宙の實相に觸れしめたるが如き感興を催さしむ繪畫の權威は譬へ絶體を攫むの器にあらずとするも吾人これを光耀の天に入らしむるの道案内者ならんか且つ夫れ美感なるものは快不快の範疇に依て事物の美醜を判断し光明の方面に人生を誘導するものなれば濁浪迷霧の裡に人生の價値の埋没せらるゝを憂ひ道念の進境を促し美は無上

の精進を希ふよりして人生の高調の詩趣と道念とを合せ撮めて最深實在に旋泳せしむるものと云ふべきか。

青葉集

言 線 生

△寫生は朱敗した。日は暮れた。頭の上で晚烏がバカダ〜と啼く。

△繪具がのらぬ。調子が合はぬ。塗る洗ふ益々面白からず、奮發一番勇氣を鼓舞して夢中で畫き終つて見れば捨て難い。

△初學者が初めて郊外寫生をするのは甚だ難い事である、師曰く『然り臨本に依るべし、臨本と同じ様な景色を見出して其れを畫けよ』と。

夏のスケッチ

北多摩 島田 晚 韻

青梅町の向ふの二股尾は、海禪寺の前に一寸した面白ろい大きな柿の樹と家根がある、駕を枉げて畑道を下りて行つた、遠景は多摩川を隔て、吉野村の丘陵遠く西より東に走つてゐる、中景がその柿の樹に家根、前景が豆と玉黍の畑になつてゐる、全體が

青味がいつた調子で、何だがいやに六つかしそうで、初めから失敗を豫期してかゝつた。

床几を据える、見取枠で見る、鉛筆で輪廓を取る、さて、着色と行つたら案の如く、鱗景の深緑な山のどんよりした色が出ぬ。

あれでもない、これでもない、へたぬりに塗り付ける、しかも盛夏の午後三時頃の日脚はぢりぢり遠慮なく、照り付ける、今は油汗三斗の淺間しき姿となつて遺つて居る。

どうやら喧しいので、氣が付いて、ふりかへつて見ると二三人の子守が早や後ろにのぞき込んで居る、とするうち迎ひにでも行つたものかおかみさんもくれば、興作爺もくる娘もくれば腕白小僧もくると云つた様な、今は後ろに左右に三面より包圍されて風はこず、妙な人いきれが鼻をつく、亦如何ともなし難し。

『マァー、みいちやんの家だれ』と、さゝやくあれば、『これ畑の中に這入りやいけない』と子守を叱る銅磨聲に、びつくりする、逆も完成の見込みはないので、要所だけ仕

上げて、道具を疊み、もと來し道を後戻りせむとすれば、吾等を何と思つてか。『ご苦勞様でした』と云ふおかみさんありけり。

そのひ

雪の下人

七月七日晴、寫生には持つてこいと云ふ好日和、畫囊を肩に裡町を眞直に賣田山へ登つた、吾島の首夏！木も草も濃綠色だ、涼風がサツト吹く、藥師様の傍の古井戸は何と無く畫趣が充ちて居る、其れを左に見て青い／＼尺にも餘る夏草の中を抜けて高島街道へ出た、路傍には草花を摘む里の乙女の影二三、だら／＼坂を登れば破屋一つ深緑に包まれて何とも云へぬ趣き！暫しこゝに三脚据へて美の園に遊ぶだ、おゝ今夕陽は向ふの山の端から名殘の光を下界へ放つてる……

少女の繪

旭川 曉 雪

元來僕は繪は好きでなかつた、描きたくも

なかつた、唯他人が描くのを見るのが面白い位、丁度三年の時學校に於て共進會があつて、生徒の製作品を陳列する事となつて各自習字繪畫を描く様に命ぜられた、此の時急に野心勃勃吾が畫を彼の額に入れたいものだと言ふ好奇心が湧いたそこで、色々の手本を見付けるに苦心し、何んでも奇抜なものを描こうと思ひ、少女を鉛筆で描いたが何うしても描けない、一時中止したがやはり僕の野心は枯れぬ。

もう愈々明日は切期限である、そこで夜おそく燈火のもとにかいたところが、偶然にも一寸とうまく描けた様で、少し似ておると思つたから翌日學校に出した所、無事會場に出品せられた。

幸か幸かこれより僕は繪畫の面白いものであるを知つた、以後夢中で寫生した、丁度夏休みに白馬會の中原君が歸省せられて、共に石狩河畔に於て畫架に向ひ種々有益なる事を教はつた、遂に今日では到底筆を放すことができぬ。

大失敗